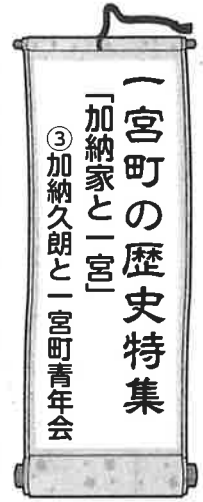


平成30年6月号



一宮町の歴史特集  
① 加納家と一宮  
③ 加納久朗と一宮町青年会

一宮町青年会は明治41年(1908)、義務教育後の青少年を中心に、社会人としての教養を社会教育することを目的として発足しました。初代会長には加納久宜の子で当時東京帝国大学(現東京大学)の学生だった久朗が就任しました。

青年会の事務所は観明寺裏の字矢倉前やぐらまえにあり、青年会・婦人会・農会のりかいの三団体の集会所として、「三会堂」と呼ばれたといえます。

青年会には様々な部がありました。植林経営を主とする「林業部」、梨、蜜柑などの果樹栽培で大きな利益を得た「園芸部」、養豚・養鶏を中心に行った「畜産部」、一宮川での蜆・鯉の養殖を行った「養魚部」、兵事訓練部、「商業部」など多種多様な活動を行っていました。

会長の久朗自身は学生だったこともあってか、直接一宮において、これらの事業に携わったことは確認できていません。しかし、近年発見された「斎藤家文書」の書簡から、当時副会長だった斎藤脩一(1889~1940)

とともに、積極的に活動していたことがうかがい知ることが出来ます。

また、千葉県下において、青年会の存在は「一大団体」と紹介されており(明治44年、「地方資料小鑑」、地方改良運動の先駆けとして評価されていました)。

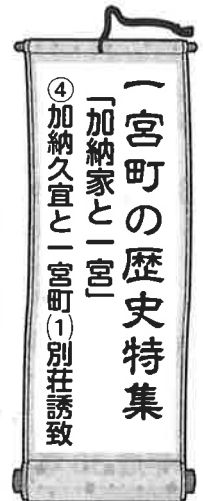
青年会はその後「一宮青年団」と名称を改称しますが、戦争に突入すると、活動は停滞。戦後の昭和26年(1951)に一宮青年クラブが発足すると、青年団の活動はこの組織に継承されました。



▲一宮町青年会果樹園の一部(戦前の絵葉書)

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成30年7月号



一宮町の歴史特集  
① 加納家と一宮  
④ 加納久宜と一宮町(1)別荘誘致

かつて一宮地域は「東の大磯」と呼ばれるほどの一大別荘地を築きました。きっかけは明治30年(1897)、両国・一宮間で鉄道が開通し、東京から半日で着くようになったことです。明治34年(1901)に海軍男爵の齋藤實まことが海岸の船頭給に別荘を建設すると、三井家や各界の名士らが続々と別荘を構えていきます。

この別荘地としての発展には加納久宜が大きく関わっていました。久宜が町長に就任する以前の話ですが、当時の町長・中村祐吉郎に一宮を海水浴場地として発展させる方策を考えさせています。中村は全国の海水浴場を視察し、神奈川県の大磯が一宮と条件が似ていたことから、大磯に倣って財界の大物と呼ぶことを提案します。これを受けてか、久宜は三井八郎次郎を招き、別荘を建ててもらっています(現在の一宮学園の敷地)。なお、三井と久宜はその後も一宮の発展のための協力関係を築いています。

当時の「東京日日新聞」(大正7年

7月13日付)の記事では、一宮の海は必ずしも理想的ではないが、それを補うものとして、松林や川、野菜や果実が豊富であるということが記されています。

一時は100軒近い別荘が建ち並んだといいますが、昭和の金融恐慌、戦争の煽りを受けてか、「別荘地・一宮」は次第に衰退していきます。

久宜の人脈と、彼を取り巻く一宮の人々の尽力によって、「東の大磯」は形成され、一宮の発展がもたらされたのです。



▲一ノ宮別荘地(戦前の絵葉書)

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416